料亭の移り変り

十年一昔という諺がある。十年どころか戦後二十五年を経た今日、花隈の料亭も他の花街に劣らず入れ替りが激しかったのも当然かも知れない。

時代の波にゆられて消えていった店、姿を変えた店などの屋号をならべるだけでも、かつて此処を古戦場として馴染んだお客や一部の関係ある人々にとっては懐かしい思い出ではあるまいか。

△花隈の古風な建物

終戦後復活した花街の昭和二十四、五年頃からの顔ぶれを大体の年代順にならべてみると、

武正・花隈亭・水野・白牡丹・若水・多聞・巴・中桐・清水・常盤木・つたや・新常盤・松石・乃武幸・むらた・栄屋・玉川・みなと家・宝家・若松・加茂川・ちく満・久松・花隈旅館・花隈花壇・井筒(そのあと千代)・富士花壇(そのあと銀松園)・現長・浜長・グリルチョコレート・幾松・花富(そのあとロン…草路)・中村家・竜田・中光・清川・ふくべ・美田・銀すし・半蔀・きぬや・新辰巳・小浜・やなぎ

等々の順で廃業されてゆきその数は約五十軒近くもある。

しかし業態をかえて今も町内をこよなく愛し離れることなく居住していられる方によし家・十四春・宮本・玉家(ボートヴィラ)・わかな等がある。

現在盛業中の料亭を紹介すると、いさ美・阿らい・松の家・花緑・魚善・冨士の家・わかくさ・とり源・長駒・森本・青葉・弁慶・豊福・天久・上伊・多聞・冨貴楼・みつや・千鳥屋・服部・山茂登・まえ田・よし乃・大村屋・山家谷・可ゞ和・福六・治作

以上の他旧市電山手線をまたいで北側に千鶴・和興・指月・山三つ輪がある。

なお関連業者として仕出しの　阿さ田仕出し並びにすしとして花隈成駒家がある他に松葉・すりーらいと・るつぼ・つるの家・グリル弥生等も盛業中である。

流動激しい業界といわれながらも比較的落着いたたずまいを見せる花隈の花街ではあるが、夢よもう一度で花隈会料席組合や花隈検番芸妓協同組合が時代に順応した近代的な花隈の花街を目指して前進していられる。

東京からの便り

遠くにありて思う「花隈」

野川清子

お手紙拝見いたしました。ますますお元気の由何よりと喜んでおります。花隈に居住しておりました節にはいろいろお世話になり有難う存じました。

お便りによりますと花隈もずいぶん変わっているらしいですね。機会があればぜひ行ってみたいとも思います。

さて、花隈の思い出を書いてほしいとのお便りですが特別に変わったこととてありませんのでどうしようかと思いましたが、役に立つか立たないか思い出すままに書いてみます。

子供が山手小学校に通学しておりましたので幼い子供の手を引いて坂のある花隈の街を歩いたこと。

下山手六電停前で子供のために交通整理をして自動車の流れの多いのに驚いた事。

（もう市電もないそうですね）

中央通りの柳が顔にあたるぐらい垂れ下って夏の木陰を作っていたこと。

夏の夕にはドン山へ虫の声を聞きにいって雑草の中に蛇を見つけてびっくりしたこと。

自治会主催の子供ハイキングで近所の奥さん達と何十何百とおにぎりをにぎったこと。

会長さん宅前の広場で櫓を囲んで夜の更けるのも知らず踊り廻った盆おどり。

バラック建？の神社の境内の小さい池に珍らしく亀がいたこと。その神社の桜の見事だったこと。

夕方ともなればお化粧も美しく着飾った芸妓さんのお座敷へ行かれるあで姿。

坂のある街とて大雨の日の本通りが川の流れのようになっていたこと。

コロンビア予備校で開かれた模擬テストに集まって来たたくさんの子供の数に驚いたこと。

等々取りとめのないことばかりでお役に立つとは思いませんがこんなことぐらいでしょう。

私も昭和二十八年から三十二年の僅か五カ年でしたが、とにかく懐かしい街です。今では東京の都心に近い処で毎日がやかましく、うるさく花隈の住いが静かだっただけに余計に思い出されます。

いつかの機会にぜひ訪れて貴男様やご近所の皆様方とお逢いしたいと念願しております。

つまらぬお返事で申しわけありませんが、お便りを頂いて懐かしさのあまり筆をとりました。ますますお元気で町内のためのご活躍をお祈り申し上げます。

かしこ

花隈は住みよい町です

福島　薫

物心のついた四つ五つの腕白時代から、小学校・中学校と机をならべた友達が健在で私同様花隈に居を構えている。料亭の親爺、電気店の社長等と既に子を持つ親爺になっている。

町内の世話をしている関係で役員会等で一緒になった帰り一杯ひっかけに行こうかということで、近くの飲み屋で痛飲することが再々、飲むほどに酔うほどに戦争中の事や復員後の暮しの話が出てくる。話題の一番は何といっても戦後変わったわが花隈の事だ。

子供の時分あちらこちらと曲りくねった自動車も通らない露地、小路、雨が降ればドボドボのぬかるみ道、空襲ですっかり焼野ケ原になった町並み、戦争の遺物の防空壕、焼あと草ぼうぼう蠅や蚊に悩まされた昼、夜、等々今はあと形もなく消えて見違えるように立派になった。

市の都市計画もいち早く実施せられ、それによる環境整備と町内役員の努力で道路の区画整理、完全舗装は町の隅々まで自動車が乗り入れられるようになった。衛生施設も充実して蠅や蚊もほとんど見られなくなった。中央通りには水銀灯が明るく夜の花隈を照らし、蛇がたくさん巣喰っていたドン山（花隈城趾）も花と緑、噴水のある近代的な公園に姿を変えた。

時代の流れというか花隈の代名詞ともなっていた花街もだんだん料亭が少なくなり、芸妓さんの姿もなかなかお目にかかれない。しかし、それでもよいのだ、料亭を転業された方々も花隈をこよなく愛し他に移ることなく五階建・六階建のマンション・アパートを建てられ変わった意味で花隈の賑わいを見せている。

花隈はすっかり都心の住宅街になって来た。商売柄私の店へたくさん町内の人が来て下さるが知らない顔が毎日々々ふえて来ている。これらの人々が口をそろえて「花隈は結構な所だ、都心でこんな静かな所はないだろう。住み心地は万点、それに三越・大丸・そごう・元町通り・センター街その他神戸の著名なところへは十分たらずで行けるほんとうに便利な町だ」等々花隈の良さをほめて下さる。花隈ッ子である私にはたまらない嬉しさである。

編集子に現在の花隈を書くようにいわれたが結構づくめのわが花隈である。取り立ててこれと言って書くこともないが、とにかく百点満点の環境よき花隈である。どこへ行っても自慢話のできる花隈である。より以上立派に美しくすることもないように思うがやはり慾がある。都心の住宅街としてますます発展して行くよう努力したい。また昔から高名の花街・花隈の伝統的な良さを大いに発揮して貰い昔の花街・花隈としての復興〃にも関心を持っている次第である。

文学雑誌

「はなくま」

今井やす子

このたび新興会から郷土誌「花隈」を刊行するから、何か投稿をと頼まれましたが拙い文も書けず困りましたが、幸い私も昭和三十五年十二月に料亭の御内儀や芸妓さんなど有志三十名ほどが協力し「はなくま」という冊子を元芸妓「歌金」こと野路菊葉さんが発刊されましたときに、私もそのお仲間入りをさせて貰った一人です。

「はなくま」は夫々がない知恵をしぼって作りあげた和歌・俳句・川柳を主として掲載した文芸雑誌（ちょっと生意気かな）のちっぽけなものでした。

それでも千冊も印刷をして買って頂いたり、お分けして好評を博したものです。ご存知のない方が大ぜいおいでになると思いますのでその雑誌より二、三転載させて頂きます。郷土誌「花隈」の資料になれば幸せに存じます。

なお「はなくま」誌掲載の方々に無断で投稿したことをお許し下さいますようお願いいたします。

「短　歌」

清川　石田清子

人知れぬ金策を苦に今宵また
　女将は酔うて声大きかり
若き妓は次々去りて廓なる
　灯かげ淋しも昔をぞ思う

歌かね　野路菊葉

芸者とはかなしきものか流感の
　熱に寝ていて髪洗う夢
部下達の社用族ぶり気つかずにいし
　あの課長左遷されゆく

すみよ　川村純代

春の夜のねむれぬ床に白百合の
　わびしく香り深にふけゆく
美わしの月光を背にたたづみぬ
　そっとすずかぜに心ならぶる

八重作　田原照子

いくたびも送り来たりしこの道の
　今宵はなぜにこうも短かき

今井ヤス子

島田まげかぶれる舞妓の姿みて
　子はこわがりて隅にちぢこまる
客のすすめる盃にのめるふりして
　笑顔にて受ける気持ち切なし

「俳　句」

松の家　鵜殿礼栄

行く春や名残りおさめの帯しめる
しまい風呂に我一人なり虫の声

そめ丸　大島節子

姿見の菊にみとれて帯ほどく
蝶のとぶ晴着女の幸あらん

菊太郎　松尾弥寿子

三味の音とだえ秋雨ふりやまず
くせ直す師匠の背の白き梅

清川　石田清子

ようように酔客去りし窓の月
若き妓にたわむる客や春おぼろ

梶太郎　黒田筆子

花隈にも鈴の音する木履の妓
あれも捨てこれも紙屑春日和

いと　清水博子

ひと夜降りひと夜しぐれて木爪散りぬ
沈丁花咲いた日だまり夢も咲く

人丸　鈴木華子

誰が植えしほほづき赤し夕涼み
友待ちしストーブの火赤々と

鈴丸　山田昌子

藤仰ぎ舞台しのぶや舞いのふり
花あやめ八等身よとすましおり

山茂登　山本千鶴

花隈は柳が招き花が咲く

歌美　佐々木登美子

お彼岸や折らずにかえる沈丁花

若くに　八木幸子

寒き夜にひとり出てみる松の蔭

歌梅　森島昌子

寒むざむと耳にもいたし下駄の音

栄駒　田島愛子

花売りの憩い居りたり木蔭かな

歌千代　生藤三代子

花すきてみどりの雨に女よき

歌二郎　大沢敏子

幸わせや傘さしかけし走り梅雨

「川柳」

鈴丸　山田昌子

草履置きいずれに足や姐妹
見守る児合格きいて晴れやかに

歌丸　山代貞夫

ふとんきて寝たる姿や車えび
古池や蛙とび込むスチャラカチャン

八重作　田原照子

初月給貰って思わずエビス顔
野球見に行かれぬつらさのテレビかな

梶太郎　黒田筆子

二日酔いきまりの悪いおけいこ場
花隈の井戸より知らぬかわずなり

福子　結崎たか

巻煙草吹いたいけんど禁煙や

芳丸　竹馬寿満子

青い目が金の屏風でやすぎぶし

貞子　古森貞子

茶のとがで寝られぬままに白湯のむ

福蝶　相川いさ子

やせぐすり飲んではみたがあきらめた

夕やけ雲

原作　近藤頼一
脚本
脚色　瀬川恭助
演出
振付　花柳芳五郎
舞台監督　西原義一
製作　木旭座

☆登場人物

芸者　小きん　二十九才
小きん姉芸者　歌奴　三十四才
〃　妹芸者　八千代　二十三才
女中　お脇　十七才
田崎信乃　二十六才
その子　恵子　六才
常盤津師匠　林弥
医者
看護婦
酒屋

第一場　茶の間

舞台正面六畳、小きんの居間、中央やや左よりに長火鉢、差し向いに座布団二枚、この部屋の左側に障子をへだてて玄関が見える。玄関の土間の正面ののれん越しに勝手口が見え、茶の間の正面障子をへだてて台所に通じ右側唐紙より座敷田村の居室。

酒屋「ご免下さい〳〵」

酒屋のれんから顔を出して

酒屋「ご免下さい、お留守ですか。小きん姐さん留守なんですか、よわったなあ、さっきあれほど急ぐんだからと言って電話がかかって来たのに用心が悪いなあ置いて行こうかしら？困ったなあ」奥の間の唐紙があいて小きん出てくる。

小きん「あら、お酒屋さん静かにして頂戴病人なんですよ」

酒屋「あ、旦那がよくないんですか」

小きん「先っきからちょっと様子が変なんです」

酒屋「それはいけませんね。じゃあこれ」と酒屋玄関に酒を置き、小きんこれを受取る。

酒屋「それじゃあお大事に、有難うございました、毎度」

酒屋退場し、小きん酒を持って茶の間に引返し、その酒を台所に持って行きまた茶の間に戻る。女中お脇、医者に持って行く洗面器、石鹸、タオルなど盆にのせて側に置いたまま長火鉢に伏せて寝つぶれている。小きんその様子を見て、

小きん「あらあらお脇ちゃん、だらしのない恰好ね。無理もないね。可愛いそうに、ここんとこ看病で疲れているものね。この私だって疲れてくたくただもの」

小きん、気兼ねそうに女中お脇を起す。

小きん「ちょっとお脇ちゃん！ちょっと！ねえ！すまないけれどお手洗いを先生の所へ持ってって頂戴」

女中お脇びっくりした様子で、

お脇「あら姐さんすみません。すっかりねつぶれてしまって」

お脇あくびをかみころしながら、

お脇「ハイ、只今すぐ持って参ります」

小きん次の間に去る。お脇鉄瓶のお湯を洗面器に入れ、その上から水差の水をさして湯加減をし次の間に去る。

舞台しばらくカラ。鶯の鳴声よろしく暫らくして小きん、医者、カバンを持った看護婦、お手洗いをのせたお盆を持ったお脇出てくる。お脇そのまま台所に去る。小きん自分で長火鉢の前の座布団などを直し煙草をすすめお茶などを入れながら、

小きん「どうぞ先生、どうも有難うございました。で先生、病人はどんな具合でございましょう？」

医者「なんともいえませんが、どうもよくないようです。いずれにしても今晩がヤマだと思います。それを無事に越せば何とか望みも出てまいりますが、まあいずれにしましてもお知り合いの方には今のうちにお知らせになった方がいいでしょう」

小きん「じゃあ先生、やっぱり駄目なんでしょうか？」

医者、ちょっと小首をかしげ黙ってお茶を飲む。看護婦気の毒そうに小きんに軽く会釈してカバンを持って一足先きに玄関に行き、医者の靴などそろえ

医者の出て来るのを待つ。医者喫っていた煙草を長火鉢にさし、

医　者「もし急変しましたら、すぐお知らせ下さい。じゃあ、どうかお大事に」

医者立上り玄関に去り、

小きんこれを送って玄関に行く。

医　者「では、いずれ又……」

小きん「有難うございました」

医者と看護婦帰り、小きん茶の間に引き返し長火鉢の前でぼんやり考え込んでいる。お脇お盆を持って台所から出て来てお台布巾で長火鉢の廻りを片付けながら

お　脇「姐さん、やっぱり駄目なんですか」

小きん、ちょっとお脇を見るが黙って考え込んでいる。その時玄関に、田崎信乃、恵子を連れて出てくる。

信　乃「ご免下さい」

お　脇「ハーイ」

お脇玄関に出てくる。

信　乃「ちょっとお尋ねしますが、小きんさんのお宅はこちらでしょうか」

お　脇「そうですけど…。お宅様は……」

信　乃「信乃と申しますけど、こちらに田村がご厄介になっているそうですが会わして頂けないでしょうか」

お　脇「田村さんですって、あのうどちら様の」

信　乃「私、田村に世話になっている者なんですが」

お　脇「エ！　旦那様の……少々お待ち下さい」

お脇、茶の間の小きんの所へ引き返し

お　脇「姐さんお客様ですよ……あのう……旦那様に面会したいとか言って、若い奥様が子供を連れて見えていますが……」

小きん「何言ってんの、おかしいわね。旦那様に奥様なんかありはしないよ」

お　脇「だって姐さん、そうなんですもの。旦那様に会わせて呉れって！」

小きん玄関に出て行く。

小きん「いらっしゃいませ。私が小きんでございますが、あいにくうちの人は今体を悪くしてどなた様にも面会させてはいけないとお医者からとめられておりますけど……何か……よろしかったら私が……」

信　乃「それじゃ田村はそんなに悪いんですか」

小きん「田村、田村とおっしゃいますけどあなたは一体どなたなんです」

信　乃「申しおくれましたが、私は田村に世話になっている田崎信乃と申す者ですが……」

小きん「それじゃ、そのお子さんは……」

信　乃「ええ、そうなんです。おはずかしい話なんですけれど、私が田村の会社に勤めております中にこうして子供までできてしまったようなわけで、ほんとうに家ではよい主人ですけれど、ここのところ十日ほど家をあけたきり帰って参りませんので心配しておりました。

むろん今までにも家をあけたことはあったんですが、こんなに続けてあけたのははじめてなんです。

それに、この子、恵子が会いたがっているものですから恥を忍んで訪ねて参りました。

もっとも戦争がすめば少しは暮らしが楽になると思っておりましたのに、反対にだんだん苦しくなって参りまして何ともこんな無様な恰好で失礼いたします。

今お聞きしますと、お医者様に面会を止められているとか、そんなに悪いのでしょうか」

小きん「それが、とっても悪いんです。恐らく、もうこれきり駄目かも知れません。でもお気の毒ですが私はお会わせすることはできません。それはあの人の容態が悪くてお医様から面会謝絶といわれているからじゃありません。私はとても今の貴女の言葉を信じる事ができないからです。だって私は今日までうちの人からそんな事を聞いたこともないし、突然あなたが会わせろとおっしゃったって、そりゃあ無理ですよ」

信乃「お腹立ちはごもっともですが、私たち親子の身にもなってやって下さい。ここのところ田村が帰って来ませんので、この子供がさびしがって〝お父ちゃんはどうしたの？どこか遠くにいっちゃったの〟なんていじらしい事を申しますし、それに何だかここ二、三日私も悪い予感がいたしますので……思い切って……でも主人がこちらにお世話になりながらこんな事を申せた義理ではございませんが……」

その時奥の唐紙を開けて歌奴、茶の間に来て長火鉢の側に坐り、お脇と一緒に聞いている。

信乃は泣き、小きんも負けまいと涙をかくして強く、

小きん「そちら様にどんなお事情がおありなさろうと私には関係のない事です。そんな夢のような事はとても信じられません。ええ！うちの田村に限って絶対に貴女たちのような親子はない筈です。だって一昨年ご本宅の奥様がお亡くなりになってからはずっと、私の処へ帰っていたんですもの。それにそんな話！一度だって聞いた事はありません。もしそれがほんとうなら……この子が田村の子としたら、田村は私をだました事になりますのね。田村と私の仲はそんな水臭い仲じゃありませんもの……ええ……そうですとも。私は田村を私一人の宝としてじっと胸に抱きしめて生きてきました。そのたった一つの私の夢⁉その夢を破ろうなんて……そんなひどい事、いいえ信じられません。どんなにおっしゃられても田村は私のたった一つの宝です。お亡くなりになったご本宅の奥様から私はちゃんとお預りしてご面倒を見ることをお引受けしたんですからね。今更どなた様にも田村をのしつけてやれるもんですか……。さあ⁉わかったら帰って下さい！花隈の小きんは意地と張りで生きているんですよ。それに今日にも息を引きとろうというあの人を……」

信乃「だからお願い！お願いします。どうか会わせて下さい」

茶の間で歌奴、お脇に耳打ちをする。

恵子「おばちゃん、私のお父ちゃんに会わせて頂戴」

小きん耳をおさえて

小きん「知らない！知らない！私しゃ、いやなものはいやなんだよ」

信乃泣きくずれる。お脇、玄関に小きんを呼びにくる。

お脇「姐さん！ちょっと」

小きん「うるさい!!」
と小きんお脇を突きとばす。お脇仕方なく長火鉢の側の物を片付け盆にのせて台所に去る。
歌奴たまりかねて玄関に出て行く。
歌　奴「きんちゃん、しっかりおしよ」
小きん「姐さん!」
小きん泣きくずれる。
歌　奴「きんちゃん、おまえ花隈の小きんだったね。何さそのざまは…ご本宅にはお跡取様はもちろんお子たちのない事はあんたよく知ってる筈よ」
小きん黙ってうなだれる。
歌　奴「だったらこのお嬢ちゃんはお前さんの旦那のたった一人のお子さんじゃないか……そのお子さんを旦那にお会わせするのはあたりまえだよ。あんた田村さんにはずいぶん世話になっていてよ。又あんたもそれだけによくしてあげてくれた、ふだんは物わかりのよいきんちゃんなのに……ね……きんちゃん……会わせてあげたらどう?……さあ、何もいわないで私に委せて……ね」
小きん黙ってうなだれる。歌奴、信乃の方に向き直って、
歌　奴「失礼いたしました。私はこの子の姉芸者の歌奴と申します。委細は陰ながら承りました。え、どうぞ会ってあげて下さい。ご遠慮はいりません。さあ!お嬢ちゃん、お上んなさい。そしてよろしくお父様のお顔をごらんなさい。二度と忘れないように!よく覚えておくんですよ」
信　乃「すみません」
恵　子「おばちゃん、ありがとう」
歌奴、信乃と恵子を案内して奥に入る。じっと坐っていた小きん、血相変えて台所に走り、さっきの酒を持ち出して大きな湯呑で続けさまに二、三杯あふり長火鉢に伏せて泣いている。うち段段酔いが廻って来る。電灯がつく。
小きん酔って何か口の中でブツブツ言っているが段々声が大きくなってくる
小きん「何さ!小きん、小きんとうまい事言ってたくせに、いざとなりゃあ男心に秋の空か……」
と言い終らないうちに又大きな声で泣き出す。お脇台所から障子を開けて茶の間に入ろうとするが、小きんの酔態に尻込みして中腰でハラハラしながらこれを見守っている。
座敷の唐紙が開いて歌奴出てくる。
歌　奴「まあ!きんちゃんあんた、どうしたの。気の弱い。しっかりなさい」
小きん「姐さん!もう何もかも目茶苦茶」
と又小きん声をあげて泣き出す。
歌　奴「きんちゃん、あんたの気持もわかるけど、あんた花隈の小きんだろう。だったら少しは相手の気持にもなってやるものよ。それが好きな旦那だったら尚更の事じゃあないの……ねえ……そうでしょう……ねえ」
小きん大きくうなづく。
歌　奴「だからさ、ゆっくり会わせてあげるのさ、ね!　ここで花隈の小きん姐さんのキップを見せてやるのさ」
小きん「姐さん、私口惜しい。ひどい旦那、皆からは旦那を一人守っているものだから、小きんは男ぎらいだの、片輪だのと陰口を聞かれながらもほんとうに!幸福だった……でしょう……なのに……それなのに……」
小きん段々乱れて来て、また泣き声になる。

小きん「こんな事ってある、あるかって言うのよ、ね！そうでしょう……私……口惜しい」
と大声で泣きながら暴れる。今まで中腰で見守っていたお脇、小きんの所に駈けよる。
お　脇「姐さん、しっかりして、しっかりして」
歌　奴「きんちゃん、どうしたと言うの」
小きん「目が、目が、ああ……頭が割れそう。早く電気をつけて、電気を」
歌奴、お脇顔を見合わせる。
歌　奴「お脇ちゃん、お医者様を早く」
お脇玄関から走って出て行く。その時奥で信乃と恵子の声。
信　乃「貴方！貴方！しっかりして……」
恵　子「お父ちゃん！お父ちゃん……」
信　乃「誰か来て下さい。誰か……貴方しっかりして、貴方、早く先生を、先生を貴方……」
歌　奴「ハイ！只今！きんちゃんしっかりしてよ。旦那が、旦那が悪いんだよ」
舞台静かに廻り始める。
小きん「姐さん！目が！目が！ああどうしたらいいの、貴方、貴方……」
と手さぐりで座敷の方によろよろ歩く座敷にあっては状況よろしく——。

暗　転

第二場　茶の間

お脇長火鉢に寄りかかって、心配そうに考えこんでいる。八千代玄関から上り茶の間に入りながら、
八千代「あら！お脇ちゃん、今日は——これ、お供え持ってきました」
お　脇「まあ、姐さんすみません」
八千代、ショールを取って坐りながら
八千代「姐さん、どうなの」
お　脇「それがちっともよくならないの」
八千代「困ったわね」
お　脇「ええ……」
八千代「何だか小きん姐さん、旦那が亡くなってから、すっかり元気がなくなったわね」
お　脇「それにこの間酒屋さんの持って来たあのお酒、メチールが入っていたんですって」
八千代「どうして酒屋さん、そんな物持って来たんでしょうね」
お　脇「それが戦争がすんだからって、酒屋さんもなかなかお酒が手に入らないんですって。だもんだから、あの酒屋さん見ず知らずの通りかかりの闇屋から初めてお酒を買って、そのお酒を家へ……」
八千代「そうだったの。きっと気の強い姐さんのことだから、二三杯キューッとやったのよ」
お　脇「こわかったわよ。姐さんすっかり興奮しちゃって、自分一人の旦那だと思っていた人に子供があったんでしょう。姐さんの怒るのは無理もないわ」
八千代「それでお脇ちゃん、姐さんが怒っていた時どうしていたの」
お　脇「もっともその時は恐くて恐くて膝ががくがくして何も判らなかったわ」
八千代「そうだろうね。私だってきっとお脇ちゃんと同じね」
その時奥の間より三味線常盤津のけいこはじまる。
八千代「あら、けいこしてんの」

お　脇「お師匠さんがお見えになっているんです」
八千代「小きん姐さんの気も知らないで、お師匠さんも随分ね」
お　脇「あら違うんですよ。小きん姐さんが気がむしゃくしゃして仕方がないからお師匠さんの音締めが聞きたいんですって」
八千代「そう！そんなものかね。無理もないわ。あれだけ好きな旦那が亡くなったんですもの。私何だか小きん姐さんが可哀いそうになって来たわ」
八千代「お稽古しているのは誰？」
お　脇「歌奴姐さん」
八千代「道理でうまいと思ったわ。それにしても小きん姐さんの側で三味線弾いていても小きん姐さん何んともないんでしょうかね」
暫く両人奥の三味線に聞き惚れる。その間に三味線止み奥より常盤津林弥、歌奴それに小きん、歌奴に助けられて出て来る。
八千代「小きん姐さん今日は、お師匠さん暫く」
林　弥「ここん処、八千代ちゃんちっとも稽古しないね。折角伸びかけているのに、ずるけちゃあだめだよ」
歌　奴「お師匠さん、この子近ごろ血道をあげているいい人が出来ているんですよ」
八千代「あーら姐さん、そんな事ないわ。お師匠さん、うそなんですよ」
林　弥「ほんとうかい？」
歌　奴「八千代ちゃん、尤もあたし達の傍で固苦しく稽古して小言いわれるよりは、好きな人との睦言の方がそりゃあいいものね……ご馳走―様」
八千代「あら、姐さん違うんですよ。ひどい姐さん」
お　脇「姐さん、八千代姐さんから戴き物です」
小きん「八千代ちゃんすみません」
八千代「たった一つなんですけれど、旦那にお供えして下さい」
小きん「そうね。亡くなったうちの人は八千代ちゃんが可愛いいからって、よくからかっていたわね」
八千代「そうよ姐さん、いつも私の事をおたまじゃくしと言うのよ。私が旦那にどうしておたまじゃくしですかって言うと、八坊は頭でっかちで尻すぼみ…」
皆笑う。お脇、八千代からの戴き物を持って奥に去る。
八千代「でも、よい旦那でしたよ」
小きん急に狂い出したように泣き出す。お脇のお供えする仏壇の鐘が聞えて来る。
小きん「ご免なさい、泣いたりして。八千代ちゃんありがとう。そんなによい旦那がなぜ私にかくしたんでしょうね。私はこの目がどうなってもどうせ思い残すことはありませんが、どうしても私に割りきれない事は旦那の気持なの」
歌　奴「小きんちゃんおよしよ。お師匠さんもいらっしゃるのに、あんたの気持はよくわかっていますよ」
林　弥「いいのよ、歌ちゃん」
小きん「お師匠さん、すみません」
林　弥「いいんだよ、小きんちゃん。泣けるだけウンと泣くんだね。そして少し体がよくなったら、あんたが旦那を思っていた情熱をそのまま稽古に打ち込んでごらん」

小きん「だってお師匠さん、私目がなおるとは思いません」
林　弥「小きんちゃん、今まで三味線を弾くのにあんた糸を見て弾いたかい。そうじゃあないだろう。芸はかんだよ。あんたが今日まで外の方に燃やし続けた情熱をそのまま芸に打ち込む事が、芸の目というか……そうだ……心の目を開かせる事になるんだ。そうなった時初めてあんたは今までつかみ得なかった物がつかみ得られるんだよ。ほんとうならばお師匠さんもこの目をつぶしたい位だ」
歌　奴「まあ、そんなひどいこと」
林　弥「歌ちゃん、そうじゃあないんだよ。かえって目のあいている方が邪念が浮んで稽古に邪魔だよ」
八千代「いいわね、芸の話なんて。私もいっそあの人と切れてもっとお稽古をはげもうかしら」
歌　奴「そうら、ばれた」
林　弥「こいっ！」
八千代「あら、お師匠さんご免なさい」
林　弥「一杯おごらせるよ」
お脇、奥の片付けをして茶の間から台所に行きかける。
八千代両手を合わせおどけた恰好で
八千代「お師匠さんかんにん、お手やわらかに」
茶の間明るく笑う。
この時玄関に田崎信乃が訪れる。
信　乃「ご免下さい」
お　脇「ハーイ」
お脇台所へ入りかけて玄関に出て行く。信乃、恵子二人。
お　脇「いらっしゃいませ」
信　乃「姐さん、おかげん如何ですか」
お　脇「それが……」
信　乃「やっぱり駄目なんですか？…失礼させて頂きます」
お　脇「どうぞ、お上り下さいませ」
信乃、恵子の手を引いてお脇に案内されて茶の間に入る。
お　脇「姐さん、この前のお客様です」
お脇台所に入る。
小きん「えッ！どなた？信乃さん！」
信　乃「姐さん！姐さんはなぜこの家をお売りになったんです」
信乃、小きんの前に泣きくずれる。
小きん「信乃さん！何も言わないで」
林弥、歌奴、八千代顔を見合わせる。
歌　奴「小きんちゃん、あんたこの家を売ってどうするの」
信　乃「皆さん聞いて下さい。今朝ほど角の周旋屋の小島さんが私の所へ十万円持って来て下さって、これを小きん姐さんからだと言われて私びっくりしてしまいました。その小島さんのいうには、まだ驚くことはありませんよ。小きん姐さんは今度都合によって田舎に帰られるんだそうで、あの家を七十万円で売ったんです。それであと五十万円登記の時、私が持ってきますからねえって……私それを聞いてとんで参りました」
信乃、小きんの方に向き直り
信　乃「姐さん、このお金折角ですが、私受け取れません。これから先姐さんは不自由な体で物入りが続くのに、この家を売ってまでのお金罰(ばち)が当ります」
小きん「違います。これはね。なるほど今は私の名前になって私の家には違いありませんが、でもこの家は元々亡くなった旦那が景気のよい時分に私

に買って下さったものです。私と違い貴女には恵子ちゃんという旦那の形見があるじゃありませんか。その恵子ちゃんを立派に育て上げるのにどうしても必要なものはお金！これから先、小学校から上の学校に上ってお嫁に行くまでには大変な物入りです。私は十年このかた、旦那を一人じめにして幸福でした。可愛いがっても貰いました。これがせめても私のあの人に対するご恩返しです。今更私はこんな身で芸者稼業に出るわけにもゆかないし、国に帰って亡くなったお父っあん、おっかさんのお墓のお掃除でもさせて貰います」

八千代「姐さんが田舎へ帰るなんて信じられないわ。それじゃあ姐さんが可哀いそうだわ」

小きん「それに私、この家にいるといつまでも旦那が、小きん此方へおいでといわれるような気がしてたまらないんです。今の私は恵子ちゃんに何かする事があの人につくす事でもあり私にとっても大きな楽しみになって来ました。というのも私の胸の中であの人が、小きん恵子の事は頼むぞと言っているような気がして……」

林　弥「小きん、お前よく言って呉れた。私はお前の芸の師匠だがお前には頭が下る。私は今日初めて芸を通じて人の真心が人間を規律するものであるということが、何だか判ったような気がする。よく言っておくれだ。私も微力ながらお前さんの面倒を見させて貰うよ」

歌　奴「小きんちゃん流石は花隈の小きん私は立派な妹を持って幸せだよ」

小きん「信乃さん、解ってくれたでしょう。このお金貴女にじゃあないの、恵子ちゃんに……ね……。今の私には恵子ちゃんが私の旦那様なんですものねえ」

信　乃「でも姐さんの事を考えると……この子にそんな大金……」

小きん「えっ！恵子ちゃんも来ていたの。そうだったの」

小きんちょっとその辺を探すような顔

小きん「恵子ちゃん、おばちゃんの所へいらっしゃい、来る？来てくれる？」

信乃、恵子を立たせて小きんの所にやる恵子尻込みながら小きんの側に行き

恵　子「おばちゃん、今日は」

小きん「ハイ今日は、お悧口ちゃんね。恵子ちゃんは幾つ？」

恵　子「六つ」

小きん、恵子の体にさわりながら

小きん「随分大きいのね。恵子ちゃんは……これからおばちゃんと仲よしになって呉れる」

恵　子「ハイ」

小きん「あのね、おばちゃん恵子ちゃんにお願いがあるの、聞いてくれる？」

恵　子「ウン」

小きん「おばちゃん、この前恵子ちゃんをお父さんに会わさないなんていじわるしたでしょう。その罰でおばちゃん目が見えなくなったの。でもほんとうはおばちゃん恵子ちゃんが大好きなの。だから今、おばちゃんが恵子って言ったら……一度でいいからお母さんと呼んでほしいの……そしたらおばちゃんの目が見えるようになるかも知れないの……ね。呼んでくれる」

恵　子「ウン」

外の者は皆涙をふいている。
小きん「恵子！」
恵　子「お母さん！」
小きん、恵子を抱きしめて声を上げて泣く、皆泣かされる。小きん泣きやんで
小きん「恵子ちゃんは大きくなったら、お父さんのように立派な人になるんですよ。このお金恵子ちゃんのだから大切にお母さんに預けときましょうね。さあ、信乃さん遠慮しないで」
信乃お金を受け取り泣く、林弥誰にいうともなく、
林　弥「私も永年花隈にいるが今日初めて胸のすくような話を聞いた。体が清められたようでさっぱりした。では八千代ちゃん送っておくれ」
八千代「じゃあお姐さんお大事に、あらお師匠さん雨ですよ」
林　弥「あす又来るからね、皆さんお先に」
小きん「お脇ちゃん！お師匠さんに傘を」
お　脇「ハーイ」
お脇、台所から蛇の目を持って出て来て林弥と八千代を、歌奴とお脇玄関まで送る。
歌　奴「お師匠さん、じゃあ気をつけて」
林　弥「それでは」
八千代「姐さん、さようなら」
歌奴・お脇「さようなら」
歌奴茶の間に戻る。さっきから小きんの膝に恵子を抱えている。
信　乃「じゃあ姐さん、私も失礼します」
小きん「まあ、いいじゃあないの、もう暫くいいでしょう」
信　乃「ええ、でも今年からこの子が幼稚園に行くので、今日ちょっと先生の所へ挨拶に行くことになっているもんですから」
小きん「そうね。お脇ちゃん、八千代ちゃんには悪いけど、さっきの戴き物恵子ちゃんのおみやげに信乃さんに持って帰って貰って頂戴な」
お　脇「あのーもうお供えしてありますが」
信　乃「姐さん、いいんですよ」
小きん「じゃあ丁度いいわ、信乃さんもどうせお参りして帰るでしょうから、恵子ちゃんはお父さんからぢかに頂きなさい」
小きん、恵子を立たせ信乃と歌奴に助けられて自分も立つ。
小きん「恵子ちゃん、おばちゃんを向うの部屋のお父さんの所まで連れてって」
恵　子「ハイ」
小きん、恵子を杖にし歌奴、信乃がつづく。お脇先に行って唐紙を開ける。

◎舞台静かに廻る

床の上に骨箱と位牌が祭ってある。恵子その前に小きんを坐らせ、その横に自分も坐る。後に信乃坐り三人で拝む。歌奴、さっき稽古した三味線等を片付けコタツに入る。三人拝み終って、
小きん「お脇ちゃん、お脇ちゃん一寸」と呼ぶ。
お　脇「ハーイ」
お脇出てくる。
小きん「先きの戴き物を取って……」
お　脇「ハイ」
お脇、小きんに仏壇から取って渡す。
小きん「お父さんが、恵子ちゃんにこれを下さるんですって」
恵　子「ありがとう」
信　乃「どうも有難うございます。では失礼いたします」

小きん「恵子ちゃん、又おばちゃんの所へ来てくれる」
恵子「ハイ」
小きん「じゃあ、ゲンマン、指切り缶切り死んでも生きてもうそつくな」
信　乃「では姐さん、どうぞお大事に」
恵　子「おばちゃん、さようなら」
小きん「さようなら、お脇ちゃんすまないけれど駅まで送ってってあげて下さいな」
お　脇「ハイ」
三人退場、歌奴、小きんをコタツの所へ連れてくる。
歌　奴「さっきの話だけれど小きんちゃん田舎へ帰って大丈夫なの、私は反対だけど……」
小きん「でも姐さん、弟がどうにかやってくれてますの。それに手紙が来て不自由な姉さんを広い都会の真中にいとくのはどうしても心配だから、迎えに行くからと言ってね。親切に言って来ていますの」
歌　奴「いいわね肉親は、しかしよくできた弟さんね。今時珍らしいわよそんな話。下手をすれば親の物でもとって食べようとするこの世の中に…。それはそうと小きんちゃん、あんた旦那の夢を見る?」
小きん「それがちっとも見ないんです。でもさっきも言った様に旦那が小きん恵子を頼むぞと言っているような気がして……」
歌　奴「そうだろうね。旦那にしてみれば恵子ちゃんが小さいから、さぞ心残りだったろうね」
小きん「でもね姐さん、恵子ちゃんにお母さんと呼ばれて、あの子を抱いてから今まで旦那さんに対して割り切れなかった気持が何んだか明るくなって割り切れたような気がするの。おかしなものねえ……」
歌　奴「そんなものだろうよ。女の気持って……ああ何んだがしめっぽくなって来ちゃった、さびしいね」
小きん「姐さん使ってすみませんけれど、そこの棚の洋酒があったでしょう。取って下さいね」
歌　奴「ああいいよ。だけど小きんちゃんお酒飲んでいいのかい」
小きん「だって姐さん、正直なところ、お医者様から手放されたこの目なんですからね」
歌　奴「まあそういえばそうだけど、私も一杯飲もうかしら」
小きん「この家で二人きりでお酒を飲むのもこれがお終いかも知れないわ」
歌　奴「そういえばそうね」
小きん「姐さん私ね、考えてみたんですけれど、大きな真赤な太陽が西の空を赤く染めて山の向うに沈んで行きますね。どうせもうすぐ真暗になるのが判っていながら、花の咲いたようにパッと明るくなる瞬間があるでしょう。
私達の今の気持この瞬間に似てやあしないかしら。
可哀そうな夕やけ雲、やがてお前は西に沈んで真暗な世界に落ちて行くのだ……」
歌　奴「小きんちゃん泣かせないで……。あら雨がやんだわ」
歌奴立って障子を開けて外を見る。
歌　奴「見てごらん、あらご免ね、小きんちゃん見えないのね。あんたの話じゃあないけど、あの夕やけ雲が真赤

になっているわ」

小きん「姐さん、その方に私を向けて下さいな」

歌奴、小きんを助けて窓の側に立たせ自分は小きんの側に坐っている。

小きん「姐さん、私の目には見えないけれど私の心の中ではあの夕やけ雲がはっきり見えるような気がしますわ」

歌奴「小きんちゃん、今あんた、可哀そうな夕やけ雲、やがてお前は西に沈んで真暗な世界に落ちて行くのだって言ったでしょう。でも小きんちゃん、その真暗な世界に沈んで行く夕やけ雲は明日は必ず天気だということを私達に約束してくれるのよ。冬来たりなば春遠からじ、そう！そうだわ。小きんちゃん、物を見る眼は見えなくなってもその間に芸の眼、心の眼が見えるようになってくるの。ね、そうでしょう」

小きん「姐さん有難う。そうだわ、私これから先お師匠さんが言ったように今までの情熱を芸に打ち込んでみるわ。何だか暗闇の中にポーッと明りがついたよう！」

歌奴「小きんちゃん」

小きん「姐さん」

二人手を取り合って――。

――幕――

以上の台本は若干脚色されてはいるが、現在も花隈に居住、常盤津・小唄の師匠として芸妓衆は勿論素人のお弟子さん達に愛され、親しまれている富士村康子姐さんの実録である。失明して二十五年芸一筋に生き今もますます元気、内弟子の雪枝さんの世話で盲人とは思われぬ朗らかな生活を送っていられる。

お目にかかっていろいろお話を聞いたがなかなか波瀾にとんだ一生で一代記として書きたかったが、この文だけでも一冊の本が出来上る。

残念ながら「花隈」の頁に限度があり、またこの台本だけでも花隈芸妓の心意気がうかがわれるのでご本人のお許しを得て掲載させて頂いた。

略歴

明治35年7月　生田区多聞通に生まれる。当時湊川神社西門筋にあった寄席の芸人の子に生まる

大正4年3月　市立湊川小学校卒業

〃　5年4月　花隈花柳界に入る

〃　10年3月　落籍され花柳界を退く

〃　〃　上京、若柳流舞踊・岸沢流常盤津習得

昭和8年2月　花隈へ戻り中検より二度目の勤め、小歌津を名乗る

〃　20年10月　失明、芸妓をやめる

〃　24年3月　芸に生きる決心をして師匠として身を立て現在に至る

台本中、小きんとあるは小歌津こと富士村康子さん、姉芸者歌奴は現在なお矍鑠として花隈検番組合長として活躍中の歌栄姐さんである。

台本振付花柳芳五郎さんは現在楽曙さんである。

（吉川一雄記）

芸妓

誌「花隈」に何か投書をとのことで……

私も花隈にお世話になりまして二十数年、終戦直後好きでこの道に入ったのですが、一生懸命に覚えたお稽古事も満足に見てももらえず、聞いても貰えない社用族の人々の宴会に駆り出され「炭坑節」や「芸者ワルツ」「松の木小唄」とばん声を張りあげての騒がしさばかりで、自分の夢の芸妓生活が何だか味気ない情けないものと思っておりましたが……。

ようやく世間も落ちついて来てご年配のお客様が追々帰って来られ、「〇〇君、今日は小唄のおさらえをしようか」「今日は端唄の一つも唄ってみたいなあ」といわれ出した時にはホットしたものです。

近頃特にお座敷を好んで来られるお客さんは素人さんでありながら小唄や端唄は勿論むつかしい清元・長唄・新内・常盤津などと玄人はだしの人が多く、私たち芸者もウカウカしてはおれません。それに遊びにこられるのやら、私たちが遊ばせて貰っているのやらというようなお方がふえて参りました。

温習会のはでやかな舞台で、力一杯自分の覚えた踊をお見せしたり、三味の音を聞いて頂いたりするのも楽しいことですが、やはり芸者は芸者、お座敷でお客と私たちが一つになって芸を語り合う楽しみは又格別なものです。

戦前からの姐さん方のきびしい躾の内にも血の通った義理や付き合いには楽しいにつけ、悲しいにつけ、いろいろな思い出がたくさん残っております。

最近は若い人で芸者になる人が少なくて、また芸事を勉強するのがきらいでお稽古の最中にお師匠はんや姐さん方におこられたら、もう稽古にも来やはらしまへん。

今では六十人ほどの同輩の中で若い人は十五、六人か二十人ぐらい。三十、四十才前後という人が少なく、あとは大年増の姐さんたちで私たちのようなその中間の者は古い姐さんや若い妓の間に立って右に行こうか、左に行こうかと迷っているぐらいです。

◁花隈おどりから…45年11月7日国際会館で

それでも今日まで来た自分の生活をふり返ると、やはり古い姐さんたちの方に傾く気持の方が勝っています。

何分芸を知らなくても「バー」や「アルサロ」に行けば収入が多いという状況ですものね。若い妓たちの気持もわからぬではありません。

現代の人々にはマッチしないかも知れませんが、好きでこの道へはいった者には測り知れない芸者のよさ楽しさが一杯あって、もっともっと頑張って花隈の花街の発展に努めたいと考えている次第です。

ずいぶん生意気のようですがほんとなんですよ。

最近には検番も料席組合も、近代に順応できる花街の再興に力を入れておられるので、遠からず華やかな変った花隈の花街が生まれるのではないかと期待しております。

つまらぬおしゃべりで大切な誌面を汚して申しわけありません。辱かしいので匿名お許し下さい。

花隈検番　○○子

花隈に住みたい

吉川一雄

私は生粋の神戸ッ子、明治の末期おギャーと生まれたのが有馬道といわれる相生町五丁目だった。

有馬道は（今でもそうだが）有馬温泉へ通ずる、当時では大きな通りであったのでこの名がつけられ、その時代の神戸のメーンストリートともいうべき賑やかな通りで魚市場青物市場もあり（その頃中央市場はなかった）洋服・呉服・家具店がズラリと並んで朝の市場、昼間の買物客で随分と繁昌していた。

朝夕には川崎造船所の工員さんが出勤、退社に群れをなして通り、直ぐ西側にできた新開地と共に神戸の中心になっていたものである。

物心地のついた頃は目と鼻の先にある新開地へよく遊びに行った。

小学校は楠公さん（湊川神社）の西側に今でもある橘小学校、学校に入ってからはその行き帰りや夜ともなればよく楠公さんへ行った。

第一次大戦も暫く終った頃で、境内には日露戦争で分捕った大きな大砲があり、その大砲へ上ったり何百羽といた鳩を追っかけ廻ったりして遊んだ。

夜の境内にはアセチレン灯に照明された観商場（今でいう博覧会の即売場みたいなものだったと記憶している）があり、その他露店が一杯出ている、夜店はある、香具師が出る、猿廻しも出る等々、とにかく大人は勿論、子供の楽しいもの、愉快なもの、ほしいものが何でもあった。

▷花隈の庭

その頃の楠公さんは超国家主義や軍国主義のいかめしさなど微塵もなく東京の浅草と共通する雰囲気をもった庶民の遊び場であったような気がする。

夕方ともなれば自宅の前を別嬪さんが毎日人力車に乗って通った。別嬪さんとは当時関西で五指に入る花街花隈のきれいどころで、今のような束髪というような髪でなく島田、いちょう返し、粂三まげ等の髪かたちで夜目にもあざやかな衣裳を身につけて人力車の上で半身になってそりかえって行く姿は見事なものであった。

色気のつくのが早かったのか、花隈に住んでおれば毎日見られるのになあ……と思ったものである。

この姿がやきついたのかニキビができだした頃にはぼつぼつ女の人が恋しくなってきた……と言って芸者遊びができるほどの金儲けもあるわけでなし、チョイチョイ花隈の夜の街をブラついたり、当時流行のカフエーでコーヒをすすりながらウエトレスといわれた女給さんと流行歌を唄ってウサを晴らしていた。

それから二十年、外地へ飛び出したり、戦争に行ったり、自分なりにいろいろと迂余曲折があり、昭和二十九年春。子供のときの夢が叶って安住の地を花隈に求めてお世話になった次第である。

時代の流れは幼い時、若い時のイメージとはすっかり変った花隈になっているように思えた。しかし変ったとはいえ、昔なつかしい日本髪姿の芸妓さんもいた。また料亭や旧家には三宮や元町ではかがれない古風な匂いがたちこめていて、子供時代の昔をかすかにも感じさせてくれる。

さあ、ニキビ華かなりし頃の夢を果そうと思っても年をとりすぎた。また町内の役員を仰せつかったり、料席組合の方々にお心易くして頂いている関係で聖人君子の生活ぶり神戸のどまん中にありながら静かなたたずまいを見せてくれる街。

何となく男心を楽しませてくれる町

緑したたる山を背に港の見える町

神戸高速花隈駅から傘なしでどこへでも行ける便利な町

朝の散歩が楽しい花隈城趾公園のある町

本通りに見事な柳のたれ下る町

とにかく子供の時の夢が実現して花隈に住めるようになった私は幸福だといえるだろう。

明治初年

神戸事件

落合重信

三宮神社の前に「史蹟神戸事件発生地」の碑が建てられている。ところが事件は百年も前のことだから神戸でも知っている人が少なくなっている。

神戸事件は明治新政府成立劈頭におけるその浮沈にもかかわろうという大事件であった。神戸の町は一時イギリス、フランス、アメリカ等の陸戦隊によって占領され、海上の諸藩の船舶まで拿捕されたのであった。

日本にとっても、神戸にとってもまさに大事件であった。どうしてそのような事件が起ったか。西宮警備の命を新政府から受けた備前(岡山)藩の藩士たちが慶応四年(明治元年)一月十一日の午後二時ごろ、三宮神社の前を隊伍を整えて通過しつつあった。この時の情景を岡久渭城氏は次のように叙している。

春とはいえ寒風烈しき正月、田辺の風物悉く蕭条、右手は茫々たる居留地、岸の白波も近く砕け、左手は河原塚淋しく立ち、麦壟つづく三宮の情景、すずろに征途の人の旅愁をそそるに十分であった。

しかも時は開港後僅かに三旬、所は嘗ては敵慨の気漲りし外夷の居留地前、彼もこれも一軍の将卒に何らかの暗示を与えねばやまなかった。三軍粛として声なしとはこの刹那の情景であろう。

突如として先登で叱咤の声がおこった。それは先登の第一砲隊の列を、外人が横切ろうとしたのを制したのである。このフランス水兵は制止に応じたが、このときさらに浜側から山手へ横切ろうとしてアメリカ水兵が現われ制止を聞かず、第二砲隊と第三砲隊との間隙がたまたま広くあいていたのを素早く通り越してしまった。

この悶着を傍で見ていたイギリス水兵があたかも備前藩士の非礼を責めるかのようにピストルを第三砲隊長滝善三郎に向けたのであった。

——ここに於てついに衝突はおこった。「斬り伏せろ」

の声とともに隊士がおどりかかった。イギリス水兵はあわてて海岸方面へ遁走した。それからしばらくして多数の外国兵が発砲しながら上陸して来たのであった。

「一大事！」と感じたときはすでに遅かった。この前後の様子は書物によって違うけれど大体このようなものであったと考えられる。外国兵部隊は、神戸の町を占拠した上で、日本政府に対する抗議書を提出した。新しい政府は外交権を確立していない、まず外国に対して政権が移動したことを認めさせねばならない。

この事件をきっかけに神戸港の運上所楼上でフランス、イギリス、イタリア、ドイツ、オランダ、アメリカ六ケ国公使に対して、天皇親政が宣言された。なお、今回の事件については、日本側に責任があること、現地は、薩長両藩で守備することを答えた。これによって外国人側は兵を市中から撤し抑留していた船舶も返還した。その結果として第三砲隊長滝善三郎の切腹ということになった。

切腹は兵庫の「永福寺」で慶応四年二月九日午前十一時三十分におこなわれた。永福寺境内にあった「滝善三郎正信碑」は永福寺が戦後他へ移転したので、現在では近くの能福寺境内に移されている。

滝善三郎の切腹は日本の危機を救ったものとして永く永く賞讃されている。

最近三宮神社の「神戸事件発生地」の碑の前に大砲が置かれることになった。これは兵庫方面の地中から出たもので、幕末期のものである。その由来はよくわからないが大砲が地中に埋められるというようなことは、市中が外国兵によって占領された神戸事件のときをおいて他に考えられないというので、神戸事件発生の碑のある三宮神社へ寄贈されたものである。（神戸史談会員）

△神戸事件の記念碑と事件のあらましを書いた説明板。（あかがねの屋根つき説明板は明治100年記念に氏子有志によって造られたもの）
（月刊「センター」提供）

三宮今昔

明治老人

私が花隈の地にお世話を願ったのは最近のこととて、花隈の古い思い出はありませんが、子供の時分の三宮はよく知っておりますので書いてみました。花隈には直接関係ありませんが、この文により当時の花隈を思い出して下さる方々もたくさんおありのことと存じます。

今、交通センタービルの屋上から眺めるとほんとうに三宮が一変し立派になった。市役所の庁舎、その前を走るフラワー道路、大きくなった「そごう」西日本一の高さを誇る二十六階建の商工貿易センタービル。

海岸通りを走る阪神高速道路、地下には神戸で一番大規模なさんちかタウン、生まれ変ったセンター街……これが敗戦の焼野ヶ原に「そごう」だけがポツンと建っていた三宮だろうか。今や三宮一帯、それはハイセンスの町、神戸のシンボルであり、神戸の表玄関でもある。

このあたりは昔、滝道と呼ばれていた。布引の滝から現在の市民病院を通り、市電路線小野浜税関前（この市電もなくなった）を旧生田川が流れていた。今の市庁舎はこの生田川の西堤防上に当る。東遊園地の東側には堤防の松林の一部が今も名残りをとどめている。

この川筋は「布引の滝へ至る道」というのでいつとはなしに滝道と呼ばれるようになった。

今「そごう」の地下を走る阪神電車が走り出したのは明治三十八年「エレキ」で動く神戸最初の電車で商都大阪と神戸を結ぶ郊外電車の始発駅もこの滝道筋。「駅」といってもちゃちなものだった。道の真ん中に丸太を植え込みトタンで囲んだ待合所、ホームもなく青天井の下で乗り降りをしていた。でも珍らしさも手伝って人気もあり、明治四十二年の大阪北の大火のときなどヤジ馬が阪神電車で満員電車の外から窓わくにぶら下って大阪まで行った……と三宮に長い間住みついている私の知人で令年七十七才の老人は語っている。↖

画き方

中心線の交叉角を直角とすること。

内円外円の距離は内円直径の三分の一とする。

神戸市章

この市章は明治四十年に制定されました。市章には二つの意味があります。

①神戸の港は兵庫港と神戸港（新港）に分かれています。この兵庫港と神戸港の海岸線がちょうど二つの扇を広げたような曲線を画いており、これを組み合わせました。

従って神戸の港を「扇港」「扇の港」と人は呼んでおります。

②現代かなづかいでは、神戸を「コウベ」と書きますが、以前は「カウベ」と書きました。この「カ」の字を図案化したものであります。

それまでの交通機関といえば国鉄だけ、それも三宮駅は現在の元町駅の近くにあって、三宮は「ウゴキマース」というユーモラスな車掌さんの掛声で動く阪神電車だけ。

電鉄ブームの始め明治四十三年には春日野道から兵庫までの神戸電気鉄道（現市電）が開業、続いて三宮から分岐した布引線の計画もでき、三宮がクローズアップされたといわれる。

大正元年に阪神は路線を市電滝道駅まで延長、仲よく市電と施設を共有して大きな板張りのドーム駅が誕生した。この滝道駅の出現で三宮附近の街はにわかに活気づいてきた。新しい電車という足の出現で、これまで三宮神社の境内や新開地の盛り場に行っていた人々の足が三宮にむけられ、昭和に入って国鉄の高架線化に伴う新「三宮駅」の出現、上筒井にあった阪急神戸駅の三宮乗入れ、そごうデパートの進出など……それに終戦後センター街が生まれ、市役所が建てられ、生田新道の数かぞえ切れないバー、スタンドなども東に延びた神戸の街、これからはさらにターミナルの三宮として新しく生まれ変ってますます発展して行くのだろう。

『神戸市民の花』

あじさい（紫陽花）

～ユキノシタ科～

あじさい（原種はガクアジサイ）が神戸市民の花に選ばれました。これは市民からのアンケートをもとに決められたもので、投票数四四、五〇〇余票のうち三〇％近くが〝あじさい〟を推せんし、審査の結果決まったものです。

六甲山一帯はあじさいが多く、つつじ、山百合と共に六甲三名花として親しまれてきました。町では六月から咲きはじめ、六甲山上では八月でもまだ美しく咲いています。

六甲山にあじさいが群生していることが発見されたのは昭和三十四年（神戸新聞たるみ版）です。酸性土壌では殊に色鮮やかに雨の多いほど美しく咲きます。初めは青いが白、淡紅色、紫褐色と変化するので〝七変化〟とも呼ばれます。花びらと思われる部分は〝ガク〟で花はその中心に細かい粒のようになっています。株分けやさし木でふやします。

花言葉は冷淡、未熟な人。

原産…日本　学名…ヒドランゲア…ギリシャ語の水（ヒドラ）と容器（アンゲア）が組み合わされたもので、湿地を好み梅雨時の花とされている。

別名…オタクサ…江戸時代来日して長崎に住んだシーボルトが、この花を愛し、愛人「お滝さん」の名前をとって「オタクサ」と訛り命名した。

（月刊「センター」提供）

みなとこうべの観光地

総面積五三〇平方キロ、総人口百三十万人、世帯数約三十万、六大都市の一。東から東灘・灘・葺合・生田・兵庫・長田・須磨・垂水の八区が並ぶ、六甲山の南麓に帯状に広がる神戸の街はとても明るい。

目前には日本一の良港をひかえ、ふりむけば緑したたる山々がおいかぶさるように迫っている、山と海とに恵まれた神戸……歴史とともに残された数多い遺跡、また新しい観光地にもこと欠かない。

全部収録できないが主なものをお知らせしよう。

1 神戸港

○メリケン波止場＝神戸開港（一八六八年）の少し前、米人ポールフランクにより開かれ、米国領事館の前にあったのでメリケンの通称で呼ばれた。開港当時の中心であったが、今では通船・巡航船の発着所となり、沖待ちの船へ往き通う世界のマドロスたちがたくさんいてミナト神戸のムードが感じられる。

○中突堤＝メリケン波止場の西にあり長さ六三七米、神戸港で一番長い突堤で四国・九州・瀬戸内海航路の豪華観光船の発着場でこの突堤上に神戸ポートタワー、港湾博物館もあり、港巡りの船はここから出る。なお各方面行きの水中翼船の発着場でもある。

○ポートタワー＝つづみ型をした珍らしい展望台で高さ一〇八米展望台からの港と市街の眺めは全くすばらしい。東西南北の景色が居ながらにして見られる回転食堂もあ

る。（入場料大人二〇〇円・小人一〇〇円）

○国際港湾博物館＝ポートタワーに隣接しており、パノラマ・写真・模型などで各国の港の全容が解説され、修学旅行生などにとっては絶好の教材で賑わっている。（博物館の入場料はポートタワーと共通になっている）

○神戸大橋＝新港第四突堤とその沖に現在埋立建設中の世界最大の人工島、ポートアイランドを結ぶ橋で日本で初めてのダブルデッキ（二階建）の三経間連続アーチで全長三一九米、クリアランス一六米とアーチ橋としては西海湾の西海橋を凌ぐ日本最大の橋、青い空にくっきり浮ぶ真紅の大橋は神戸港の新名所となった。

○摩耶大橋＝摩耶埠頭と新港突堤との連絡橋で昭和四十年六月に完成した。この橋は一本の柱で橋を支えるいわゆる「ヤジロベー」型の斜張橋で日本で初めてのもので、しかもこの一本の柱が橋の下を通る小型船舶の航行の支障にならないよう、中央から東の方へずれて建てられている珍らしいもの。橋の長さ二一〇米、取付部を入れると五一〇米、幅一四米、クリアランス二〇米の有料橋である。

○ポートターミナル＝神戸大橋をポートアイランドに渡る第四突堤に新しくでき、外国航路の大型観光船四隻が同時に接岸ができ、送迎用デッキ・ロビー・ショッピングセンター・レストラン・駐車場などがあり、これまた神戸の新名所。

○港めぐり＝前記中突堤から発着している。東洋一を誇る港湾施設や碇泊中の世界の国々の船舶群、川崎・三菱の二大造船所など日本の基幹産業を「マリンガール」の説明とともに五十分で見て廻れる。特に汽笛とカモメの群れがミナト情緒をかき立ててくれ、また海上からの市街

地六甲連峰の緑の山々の眺めはたまらなく美しい。（遊覧船大人一八〇円・小人九〇円）

2　都心あちら、こちら

○花時計＝市庁舎の北隅にあり、昭和三十二年新庁舎完成を記念して建設、直径六米、時計の長さ一五・五米、文字盤を飾る美しい季節の花は約二カ月毎に植えかえられる。また傍に立つ一〇米のトーテムポールは姉妹都市「シアトル」から贈られたものですばらしく見事なものである。（市庁舎へ三宮駅から徒歩二分）

○花隈公園＝織田信長時代の花隈城趾を近代化して保存し、市営モータープールを造り、屋上には噴水あり、花あり、緑あり、滝ありと市中の公園には珍らしい建築美を見せている。（花隈町内）

○相楽園＝元神戸市長小寺謙吉氏の本邸で戦後神戸市に譲られ春秋二回一般に公開される。花隈には重要文化財に指定されている異人館（旧ハッサム邸）が復旧建設されている。（元町駅から徒歩五分、県庁々舎北五〇米、入場料大人・小人とも五〇円）

○海洋気象台＝大正九年設立、わが国に四つある海洋気象台では最古、気象・予報・潮の観測・大気汚染調査を主業務にする。（市バス下山手六より北徒歩一〇分）

○関帝廟＝三国志でなじみの深い中国三国時代の武将関羽を祀る。規模は小さいが色彩あざやかな中国風寺院で在神華僑の参詣者が多く、正月や祭のときは爆竹を鳴らして中国ムードいっぱい（市バス下六より北西一五〇米）

○諏訪山公園＝高さ一六〇米の小丘で市街と港を一望におさめる眺めのよいところ。園内には明治七年フランス人「ジャンサン」が金星を観測した記念碑がある。隣りの山には市章を型どった植木の植林があり、毎夜電飾をして市内はおろか、海上遠くから眺めることもできる。（市バス諏訪山下車すぐ）

○布引の滝＝市内を流れる生田川の上流に雌滝・雄滝の二滝がかかっている。下の雌滝は高さ一九米、三〇〇米上流にある雄滝は四三米、水は落ちる前に五つの甌穴で白い泡をつくり、白い布をかけたように見える処からこの名がある。市街に近いのに深山幽谷の感があり、古くから詩歌で有名。（市バス布引下車北へ五〇〇米）

○王子動物園＝日本有数の動物園で、多数の動物を飼育し

大型船４隻が同時に接岸出来るポートターミナルと人工島「ポートアイランド」を結ぶ橋。

珍らしい南方産の動物もたくさんいる。園内は娯楽遊戯施設も完備して子供の天国であり家族そろって憩の場所である。春は桜の名所であり市内都心で花見のできるのも楽しい。隣接して立派な王子陸上競技場もある。（市バス動物園前、国鉄灘駅より北へ徒歩五分、入場料大人八〇円・小人四〇円）

○清盛塚＝兵庫の地に都を定めた「平清盛」の霊を弔うために北条貞時が諸国廻遊のときに建てたものといわれ、高さ九米の堂々たる石塔、東側にある琵琶塚は平経正の琵琶「青山」を埋めた所と伝えられている。（中央市場西北三〇〇米）

○敦盛塚＝須磨浦公園の西端、ひときわ高い三本松の根元にある高さ四・五米の五輪の塔。源平の戦いで熊谷直実に討たれた平敦盛の供養塔とも北条貞時が平家一門の供養のために建てた「あつめ塚」という説もある。（山陽電鉄須磨浦公園駅すぐ西）

3 ショッピング

○さんちかタウン＝交通センタービルからエスカレーターに乗り「サンティカ・デ・ラマンテ」の軽快なリズムと共に地下へ下りると日本一明るく美しい地下商店街がある。これがさんちかタウン。「レディスタウン」「メンズタウン」「ファミリータウン」味ののれん街、一四三の店館がそれぞれ専門のタウンに集められ催し物の広場

もあり、神戸ッ子の人気を呼んでいる。隣接する市営地下駐車場へは動く歩道で結ばれている。

○三宮センター街＝神戸の代表的「ショッピングセンター」和洋専門店、舶来雑貨店、喫茶店などが建ち並び、さんプラザーの高層建築物もでき、神戸ッ子のプロムナードとしてますます発展している。

○元町通り＝大阪の心斎橋と並び称されるところで、一丁目から六丁目まで道幅は広く東から西にゆるやかなカーブに沿って軒を連ねる商店には老舗が多い「雨の元町すずらん灯」と謳われた。昔より元ブラの常連は絶えず三宮センター街の若さに対して、しっくりした大人のムードが好まれる。

○メトロ神戸＝神戸高速鉄道の開通と共に誕生したショッピングどころで、同鉄道神戸駅と新開地駅間の地下にある商店街で、シックに明るく東のさんちかタウンに対抗する新進の地下センター。

4 美術館めぐり

○白鶴美術館＝灘の生一本「白鶴」の醸造元嘉納治兵衛氏の蒐集した美術品を所蔵する美術館で桃山時代の豪華な建物が美しい。所蔵品は主に中国の青銅器・鏡・銀器・陶磁器・日本の勾玉・経巻・古工芸品等約一千点。（阪急御影下車歩いて十五分。入場料大人一〇〇円・学生七〇円・小人五〇円）

○南蛮美術館＝池長孟氏が生涯をかけて蒐集したコレクションを中心とする南蛮美術品約四千五百点を所蔵。南蛮美術品とは桃山・江戸時代を通じて西欧文明の影響を受けたエギゾチックな美術品の総称で聖フランシスコ・ザビエル画像他重文に指定されているものも多くあり一見に価する。（市バス南蛮美術館前下車、入場料大人一〇〇円・小人五〇円）

○市立考古館＝昭和三十九年市内灘区桜ケ丘で出土された銅鐸・銅戈を保存してあり、出土品の大半は重文に指定されている。（須磨離宮公園内、入場料大人四〇円・小人二〇円）

○兵庫県陶芸館＝県下古陶器の蒐集品を展示している。古丹波焼・珉平焼・出石焼などがぎっしり展示されていてなかでも慶長二年の銘のある古丹波焼の壺は逸品。（県庁舎すぐ東五〇米、入場料大人一〇〇円・学生五〇円）

▷楠木正成の墓「鳴呼忠臣楠子之墓」
湊川神社内水戸光圀建立

○兵庫県立近代美術館＝昭和四十五年十月完成。（国鉄灘駅北へ五分、市バス王子動物園前）

○滴翠美術館＝芦屋にあり、京焼・紀州焼・陶器類・京人形・羽子板・かるたなど多種多様に展示されている。

○菊正宗の酒蔵館＝阪神電鉄魚崎駅の傍にあり、清酒造りの道具のほとんどが展示されて酒処「灘」の模様が一目でしのばれる。

5 神社

○生田神社＝神戸の中心三宮の歓楽街のど真中にあり。稚日女命（わかひるめのみこと）を祀り神前結婚式場と交通安全祈禱場で賑わっている。境内には「梶原源太のエビラの梅」があり、生田の森は小さくなったが源平の昔をしのばせてくれる。

○湊川神社＝国鉄神戸駅北一五〇米にあり、楠木正成を祀り市民には楠公さんと親しまれている。徳川光圀が建てた有名な「鳴呼忠臣楠子の墓」の墓碑は正門の直ぐ右手にあり、本殿は鉄筋コンクリート造りになったが、内部は総檜造りで天井の絵は横山大観など日本著名の画家の手になる見事なものである。（宝物殿大人八〇円・小人四〇円）

○長田神社＝広田・生田と共に神功皇后が建てたという、延喜式内に列する神社で開運の神として信仰され商売繁昌を祈る人々の参詣が多い。有名な追儺式は二月節分に行なわれ、たいまつをかざした鬼達が古雅な舞を繰展ろげる。（高速神戸長田駅北四〇〇米、市バス長田神社前）

6 仏閣

○**天上寺**＝摩耶山上にあり、仏母摩耶夫人を祀る。いくつかの堂塔が建ち樹齢千年といわれる大杉や「赤松円心」らの墓碑もあり幽寂の感が深い。（摩耶ケーブル山上駅から西へ五〇〇米）

○**大竜寺**＝再度山上にあり、弘法大師が唐より帰りて建立したといわれ「お大師さん」と親しまれる。大師の命日には参詣者で大賑わい（市バス修法ヶ原行山門前下車）

○**須磨寺**＝真言宗須磨寺派の大本山、寺宝に平敦盛愛用の「青葉の笛」敦盛画像などがあり、敦盛や弁慶などの故事によるものが多い。附近にはラドンと硫黄を含んだ「須磨温泉」や大池遊園地があり、桜の名所としても知られている。（山陽電鉄須磨寺下車三〇〇米）

7 須磨・舞子

○**須磨離宮公園**＝元の離宮跡で市が譲渡を受けてから緑の芝生・四季の花・大噴水・人工滝・遊歩道をあしらった西欧風の公園で園内からは瀬戸内海の眺めもよく、夜は彩色された噴水と芝生が素晴らしい。園内に前述の神戸市考古館がある。（市バス公園前下車、入場料大人六〇円・小人四〇円）

○**松風・村雨堂**＝在原行平に仕えた松風、村雨の姉妹が、行平が都へ去った後ここに住んだという小さな庵、姉妹の石塔も祀られている。（離宮公園正門下る直ぐ）

○**須磨海浜公園**＝もと住友別邸跡、水族館、国民宿舎、フィシングセンター、ビーチハウス、野球場、ヨットハーバ等を持つ広大な公園で、夏ともなれば阪神間の海水浴客で大賑わい、西隅には明治五年に設置された日本最初の和田岬灯台が移されている。（市バス水族館前下車）

○**須磨水族館**＝昭和三十二年開館、冷暖房完備・淡水・近海・熱帯・各種目三百八十種を収める。観覧水槽が立体的になっているので見やすいし、南方系の魚類の多いことは日本一、屋外は一大遊園地として娯楽・遊戯設備もあり、大小四つのプールも完備して市民憩の場所である。（入場料大人八〇円・小人二〇円）

○**須磨浦公園**＝六甲山系の西南端鉢伏山を中心とする山と海との自然公園。山が極端に海に迫り急峻な傾斜で海に

入る。ロープウェイ、観光リフトで山頂の回転展望閣に坐れば、裏の山や表の瀬戸内海、美のダイゴ味が満喫できる。山上遊園のコンピューターシステムのドレミファ噴水、ウォータースコープ等の施設が整い、また春は桜、つつじ、秋の萩、紅葉は美しい。海辺に下ればビーチハウスも完備、海水浴にも適し一の谷古戦場・敦盛塚など歴史の足どりを探勝することもできる。（山陽電鉄須磨浦公園駅）（ロープウェイ大人九〇円・小人四五円、観光リフト大人・小人共六〇円、カーレーター大人・小人共五〇円、回転展望閣大人七〇円・小人三〇円）

○舞子公園＝東は須磨浦、西は明石に連なる松林がそれ、文字通り白砂青松の地、娯楽設備は須磨浦公園等に劣るが眼前に見る淡路島、明石海峡の眺望など落ち着いた風趣は捨て難い。なお園内には呉錦堂の別邸移情閣があり、孫文が日本亡命中に住んでいた。（国鉄・山陽電鉄共舞子駅下車すぐ）

8 山

○再度山＝（標高四六八米）延暦年間弘法大師が入唐の際この山で海上安全を祈願し、帰国のとき再び御礼参りをしたのが「ふたたびやま」の由来、現在ではふたたびさんと呼ばれている。山上には前述6の項の大竜寺がある。その北にある池は修法ケ原と呼ばれこの辺一帯を再度山公園と呼ぶ。池畔にはボートハウス、売店などがあり市民憩の場所、近くには外人墓地・教育植物園・森林植物園があり、桜・つつじ・楓などが一面に茂り、都心から僅か二十分で深山幽谷の気分が味わえる。また再度山ドライブウェイ（無料）は市街と港の眺望がよく表六甲とは異なった趣きがある。（市バス修法ケ原終点）

○摩耶山＝（標高六九八米）中腹の天上寺（前述6）に仏母摩耶夫人を祀るところからこの名がある。春の桜、夏の納涼、秋の観月によく、山上には国民宿舎や遊園地がある。夜景は一段と美しく宝石をまき散らしたような光彩は百万ドルの名にそむかない。山上へは三宮からバス摩耶ケーブル、ロープウェイで約三十分（市バスケーブル下まで三〇円、ケーブル、ロープウェイ共大人一〇〇円・小人五〇円）

○六甲山＝（標高九三二米）神戸市街の背後に延びる六甲連山は東は宝塚から、西は須磨・舞子に至る東西四〇キ

△舞子の浜。中央の建物は移情閣、通称六角堂と呼ばれ呉錦堂の建立。

ロ、南北一〇～二〇キロの山地でそれほど高い山ではないが都心から三十分たらず、一般に六甲と呼ばれているのは六甲ケーブルで登った附近一帯で明治三十六年に開かれた日本最初の六甲ゴルフ場を中心として東は極楽茶屋附近から展望台、カンツリハウスのある凌雲台、西は記念碑、丁字ケ辻あたりまでは平坦でその中に庭園あり池あり、ホテル、療養所、諸会社の寮等々宿泊設備が集中している。山上には完全に舗装された縦走路が延び山上の回遊道路となっており、「サンライズロード」「サンセットロード」の名で親しまれ、芦屋へ有馬へ宝塚へとドライブを楽しむことができる。年間登山人口二百万人、夜の阪神を眼下に見おろす夜景は摩耶山の百万ドルに対して千万ドルともいわれている。

○カンツリーハウス＝六甲山上駅から東へ三キロ、山上最大の遊園地山小屋風の食堂、八代池、大芝生、噴水、リフトなどを含み家族連れやグループで賑わう。北側には人工スキー場があり、スケートと共に冬の六甲のスポーツの殿堂となる。（入場料大人八〇円・小人四〇円、人工スキー場大人六〇〇円・小人三〇〇円）

○十国展望台＝カンツリーハウスの傍にあり、ミナト神戸

を足下に淡路島・大阪・和歌山など十ヵ国を臨むことができる。（入場料大人七〇円・小人三〇円）

○六甲ゴルフ場＝明治三十六年に開かれた日本最初のゴルフ場、展望がきき外人にも親しまれている。四月から十一月までがシーズンで冬はスキー場として開放される。

○六甲山牧場＝六甲山と摩耶山の中間にあり、原口前市長がスイス視察の土産で完成、一〇〇ヘクタールの草原にスイスの山岳牧場を真似た赤いトンガリ屋根のサイロと牧舎が散在している。乳牛・緬羊が放牧されており、近くの馬場では高原の乗馬を楽しむこともでき、山小屋風のロッジではしぼり立ての牛乳を飲ませてくれる。（乗馬、馬場二周、大人三〇円・小人二〇円）

○高山植物園＝故牧野富太郎博士の指導で開かれた海抜八六五米、平均気温九度Cで北海道南部と同じというめぐまれた地勢でアルプス、ヒマラヤと言った世界の屋根から集められた高山植物が約一、二〇〇種栽培されており、園内には林間宿舎もある。（カンツリーハウスのすぐ南、入場料大人五〇円・小人三〇円）

○六甲ケーブル＝ドライブ以外に簡単に山上へ行ける足として利用者が多い。（大人一五〇円・小人七五円）

○六甲有馬ロープウェイ＝日本最長のロープウェイとして昭和四十五年八月完成、六甲ケーブル山上駅から北東へ尾根づたいに天狗岩駅・カンツリー駅等を経て有馬温泉に至る全長五キロ、神戸港や大阪湾、またハイキング、ドライブで味わえぬ空中からの六甲の全貌を楽しむことができる。（大人四八〇円・小人二四〇円）

9 有馬温泉

○有馬温泉＝有馬温泉が神戸市内と聞いて驚かれるだろうが、昭和二十三年神戸市に合併して兵庫区有馬町という。裏六甲の谷間海抜三六九米にあって「お医者様でも有馬の湯でも」と昔から恋病い以外は何でも治るといわれ、東の「草津」と並んで西の横綱として折紙をつけられている。春は桜が咲き乱れ、夏は避暑に最適、秋は観月、紅葉、松茸狩、冬はコタツで雪見と四季を通じて旅情をなぐさめてくれるデラックスなホテル、旅館もあれば市立温泉会館や有馬ヘルスセンターのような大衆化した設備もあるので気軽に行ける京阪神の奥座敷である。宝塚からでも六甲山からでも神戸の都心有馬街道からで

◁六甲山牧場。市民の憩いの場として欠かせない。

も行けるが、神戸電鉄新開地駅から三十五分一六〇円。

○虹ます釣り＝鼓ヶ滝の近い下流にあり、米国産の虹ますが大小無数に養殖され、上手下手を問わずおもしろいほどよく釣れ入湯客をよろこばせてくれる。（入場料大人五〇円・小人二五円、釣竿一本二〇〇円、二匹無料）

○鼓ヶ滝＝温泉の南六甲山のふところにある滝川の上流に有馬四十八滝とよばれる大小の滝がかかっている。鼓ヶ滝はその中の一つで上下二段に分かれ上段は夫婦滝、下段が鼓ヶ滝とよばれる。水音が山々に反響するさまが鼓の音に似ているところからこの名がつけられた。

10 市内観光バス

○神戸市営市内観光バスで定期的に発車しているので一人でも行ける。市内見物見学にはもってこいである。Aコース・Bコース・Cコースと分かれて乗場はいずれも三宮交通センタービル南玄関である。観光バスはコースによって違うがいろいろな観光地を案内してくれる。（料金は各コース共大人五〇〇円・小人三四〇円）

神戸市民の歌（昭和34年制定）

好きな町

一、海からきらめく光
光の中におきあがる町
おきあがる町
ああこの町が好き
この町に住んで
マドロスの　マドロスの
口笛をきく

二、山からにおいくる風
緑にはえてきそい立つ町
きそい立つ町
ああこの町が好き
この町に住んで
峰々を　峰々を
ハイキングする

三、あかねの空に鳴る鐘
ドームのみえる坂のある町
坂のある町
ああこの町が好き
この町に住んで
住む人の　住む人の
明るさを知る

四、世界にこだまする槌
あらたに船を生みつくる町
生みつくる町
この町に住んで
すこやかな　すこやかな
手と腕を見る

みなと祭の歌

〽神戸みなとは街から街へ　ヨイヤサ
港祭の港祭の灯がつづく
港祭の灯がつづく　みなと祭は
ヨイ〳〵〳〵〳〵　火がつづく

〽上る花火もあの行列も　ヨイヤサ
港祭の港祭の花と見る
港祭の花と見る　みなと祭は
ヨイ〳〵〳〵〳〵　花と見る

〽誰もとめぬに出舟が止る　ヨイヤサ
港祭が港祭が止めるやら
港祭が止めるやら　みなと祭が
ヨイ〳〵〳〵〳〵　止めるやら

〽守れ神戸を楠公さまよ　ヨイヤサ
港祭が港祭がつづくよに
港祭がつづくよに　みなと祭が
ヨイ〳〵〳〵〳〵　つづくよに

花隈音頭

二上り

〽ハー神戸よいとこ花隈情緒
知るも知らぬも皆きゃしゃんせ
ともに手をとり夏の夜を
一度踊ろじゃないかいな
ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵　ヨイヤサ

〽ハー神戸よいとこ日本の港
あがるお客の手をひきつれて
ともに行きましょ花隈へ
一夜踊ろじゃないかいな
ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵　ヨイヤサ

〽ハー神戸よいとこ花隈へござれ
いきな音〆の音ききながら
好きなお方と手をひいて
共に踊ろじゃないかいな
ヨイ〳〵〳〵〳〵〳〵　ヨイヤサ

※時季により一番の歌詞の夏の夜は春秋冬とかえてもよい。

月の輪おどり

二上り

〽梅の岡本桜は生田松の良いのが湊川
わけて花隈花すがた
ヨサ〳〵わけて花隈花すがた

〽武庫の川辺の茶吉どの年が十五で
若ざかり
月はまん中　心は月の
ヨサ〳〵月のまん中　心は月の

〽エーめでた〳〵の若松様よ枝も栄えて
葉もしげる
花の須磨寺　若木の桜
残る若葉の一の谷

〽出船入船みなとの錦　西国大名の船じるし
立てて帆柱千本の
ヨサ〳〵立てて帆柱千本の

ラメチャンタラ、ギッチョンチョンの歌

神戸に過ぎたものたんとある
町なかふみ切り邪魔をする
おいしゃさんと、せんべやが多すぎる
居留地に便所がなさすぎる
牛、牛や、牛の肉、なくてもよいのが相生橋で
べらぼうにでっかいのが造船所
（はやし）ラメチャンタラ、ギッチョンチョンノパイノパイノパイ、パリゴットバナナデフライ、フライ、フライ。

（大正十年ごろの流行の歌）

二度といくまい　兵庫の神戸
いたら異人が　ペケかます

（風土記）

神戸、神戸と皆いうて行きゃる
神戸ぬくいか　みなはだか

（明治二年ごろ）

神戸よいとこ　みな行てしまう
　後へ残るは　わしひとり

親は邪険で　子は洋妾(ラシヤメン)で
　弟神戸で　牛殺(ギユウコロ)す

梅は岡本　桜は生田
　松のよいのは湊川

ばばじゃばばじゃと　いわんすけれど
　こんなばばでも　花が咲く

行こか柳原　もどろか神戸
　ここは　思案の湊橋

京の白かい　大阪の茶がい
　尼の鳥貝　兵庫のめっそかい

あなた一人を　汽車にと乗せて
　わたし一人は　ステーション

神戸ステンショエー　往きしもどりの休み場所
三宮、住吉、西の宮、カンカンカン
カラカンノ神崎や　着けば　大阪　ヤンレ汽車エ
ーア汽車汽車

○山陽鉄道の始まりは　兵庫にて
　その名もやさしき　柳原　アレなびく須磨の塩
　煙
○ゆうべ舞子と添い寝して　夜を明石
　けさの別れの恋しさに　アレ大久保を後に見る
○土山越えて加古川の　薬師如来さんを伏し拝み
　アレおててあわして阿弥陀駅

神戸市中じゃ　田舎の手水(チヨウズ)
　なかに福原　あるわいな
高速名神　車がいそがしい
　客はそわ〳〵　気もそぞろ
元町通って　花隈へ御案内

（梅が咲いたかの替歌、四十五年花隈おどりで披露
料亭まえだ女将作詞）

なつかしのメロディー

本誌編輯に当り、町内の古老と言っては失礼ですが明治生まれ、大正生まれの方々からいろいろ話を承りましたが、その内面白いと思ったのが神戸にまつわる歌の数々です。流行語にあやかり「なつかしのメロディー」と題しましたが、果して題に似合うかどうかはわかりません。何分古いこととて文章、歌詞の不備等はお許し願います。

題、不詳

一、相生橋は高いな
　上には人が、下には汽車が
　夜、ひる通る

二、楠公さんはエライな
　日本の人もよその国の人も
　皆みなまいる

三、諏訪山公園よろしいな
　南に海よ、うしろに山が
　夜、ひるはえる

〔註〕この歌は明治四十三、四年ごろ流行ったもので当時神戸の中心であった花隈のすぐ西の相生橋、湊川神社、北の諏訪山を歌ったもので、町内豊沢スミエさんからお聞きしました。

神戸市民の歌（大正末期）

一、平相国が一代の
　豪華に築く経ヶ島
　福原京のいにしえも
　和田の泊りは賑わいき
　フルエ〳〵　神戸市民

二、大楠公が往年の
　苦戦の跡はみなと川
　流れの末は変れども
　英霊今もおわします
　フルエ〳〵　神戸市民

みなと祭の歌

〈神戸錨山市章がはえる
だてに招いた船じゃあない
巻けやウインチ巻け〳〵ジャン〳〵
みなと繁昌の大行進
月なら霜月七、八日　歌えや　おどれ

神戸行進曲

一、雨の元町スズラン燈
ぬれて光ったアスファルト
若いマドロス　恋あさる　恋あさる

二、トーアロードの宵やみに
しのぶ南京さんの恋がたり
金とヒスイの　夜がくる　夜がくる

三、異人屋敷の赤い屋根
ここは山の手花匂う
窓にしょんぼり　ペルシャ猫　ペルシャ猫

マダム神戸

一、赤と緑のテープの雨が
切れて涙の雨となる
舟は出て行く神戸の港
海は広重、二日月

二、摩耶はケーブル、六甲はリング
恋のリュックサック肩にかけ
つんだスミレを外人墓地に
あげるサンデー二人連れ

三、何をさわぐぞ福原雀
ジャズに更けゆく新開地
昔なつかし青葉の笛が
むせぶ港の夜の風

なつかしのメロディーではありません。近代の歌謡曲で「銀座・京都・神戸」「神戸で死ねたら」「さよならのいえない街」といろいろ歌われておりますが、ご存知のこととて省略させて頂きます。

花隈名物

盆おどり

八月二十三、四の両日は関西地方では昔からの習慣の地蔵盆である。子供の無事息災と成長をお願いするお祭である。この日お地蔵さんをお祀りしてお供養を出し子供に楽しんで貰うのである。所によっては盆おどりもして夏の夜を愉快にすごすのである。町内会でも日本のよき伝統の地蔵盆と盆おどりを計画、町内はおろか近隣の子供さんを集めてあと僅かになった夏休みの最後の夜の楽しみを味わって貰うと毎年行なって来たが交通事情や場所等の関係で二年ほど中止されていた（中止の間は町内蔵島神社境内で福引や金魚すくいの納涼大会を実施していた）が花隈公園が完成され、市当局の好意で場所の提供を受けることができるようになった。昭和四十四年から復活、市内著名な商社のスポンサーの後援で賑やかに行なわれることになった。去年は四〇〇、今年は五〇〇の子供達がユカタに三尺帯、うちわ片手に、炭坑節・ポートタワーの唄・みなとの祭・阿波踊・ジェンカ等々手まねふりまねで踊る姿はほんとうに楽しそう、民謡連の奥さん達の指導も最高潮になる頃、付添いのお母さん・姉さん・お父さん・兄さんも飛び入り、お座敷帰りの芸妓さん、公園散策に来た若いカップル、アベックの人々もメロディーにつられて仲間入り。

踊の輪は次々と大きくなって行き夜の更けるのも知らない、人と人とのふれ合い親睦にはこの上のない行事、ほんとうに伝統の日本の味は残すべきだとつくづく思う。毎年この行事だけはつづけて神戸の名物にして行きたい。

新作

神戸音頭作詞について

福田とよ

今回はからずも花隈の方々を中心として、市内各地の有志のご温情によって「花隈落城四百年」の盛大な法要と永久にその昔を残す「花隈城天守閣趾」の建碑が完成されました。この喜びは到底言葉には申しつくされません。感謝の至りでございます。

私は八十六才の老婆となったのでありますが、少女時代から祖母や母に聞いておりました花隈城の跡も、神戸有志諸氏のご厚意で他に類を見ないすばらしい近代的公園とされまして、昔物語りも吹きとんでしまった感があります。

私は喜びに堪えず新作「神戸音頭」を綴ってみました。日々朝夕ラジオで聞く日本各地の音頭にいまだ神戸賛歌の音頭を作詞されたようでなく、来年「万博」を控えここに一番神戸自慢を世間に吹聴してはいかがや、世の識者の皆様方拙作ご笑覧下さいませ。

尚、また愛郷文章家の立派なご作詞を楽しみにお待ちいたします。

新作　神戸音頭

ヘハヤシ言葉

一、ハーサッサ
　わしが日本で自慢の港
　　神戸埠頭の賑わいは
　数万トンの外国船も
　　小舟のように出入りし
　おとすドル〳〵ジャパン一

二、サテ
　昔なつかし花隈城も
　　モダンプールと化粧して
　摩耶観音を左におがみ
　　ヤングレデーのミニスカート
　浜の潮風一寸なでる

三、ハーヨイヨイ
　あれにそびえる建物(タテモン)は
　　神戸埠頭の貿易館よ
　高い富士山おどろいて
　　ワンダフールと手をたたく
　貿易館も笑顔して
　　サンキュー〳〵ウエルカム

四、ハーサッサ
　神戸みなとじゃ花隈よ
　　名物すしに名代の料理
　美人ぞろいのほどのよさ
　　さあさ、行こうよ花隈へ
　忘れられない花隈へ

編集子

町名物語り

花隈町にちなんで

川辺賢武

花隈町（ハナクマチョウ）は昔ここに花隈城があったのでよく知られ、また明治になってから一流の料亭が栄えて有名になっているところである。

花隈は文字では花熊や鼻熊とも書いたものがあるが、地形からいえば台地で南の先へ突き出たハナサキで、正しくは端前（ハナクマ）というべきであろう。

城の地点は神戸の海にのぞんだ台地で、海陸の要塞地を占めていた。城の規模は、岡山の池田家蔵の図面によると本丸、二の丸、三の丸があり天守（今の福徳寺のある土地）をそなえ、ヤグラの設けがあり、本丸の周囲と二の丸、三の丸を合せた周囲に堀があり、近世城郭の形態を整えた偉容を示していた。その西に「花隈町」四ヶ町を郭内に取り入れてある事は注意される。

これを現在の地形にあてはめると、東は県庁の西の通り西は下山手通六・七丁目のあいだの善福寺（モダン寺）のところ、北はほぼ市電の山手線（現在なし）に近く、南は北長狭通の国鉄高架線までが城の区域であった。

なお図面によると、南側の城壁の石垣の高さは七間（一三㍍）とあり北は切り岸四間（七㍍）とある。城の東、今の北長狭通五丁目辺に侍（サムライ）町が二ヶ町、その南に足軽（アシガル）町が三ヶ町あり、三の丸のあいだに断崖を造って長籔といった。城の区域は東西およそ二百㍍、南北およそ百㍍と見られる。

享保十七年（一七三二）に書かれた「花隈落城記」にはこの城に上部村（神戸村のこと）そのほか在方のものが沢山入り込んでいて戦争にも参加していたが、ある数名が、よい敵を馬上から突き落したが首をとる方法を知らずウロウロしているところへ勝手をしった武士が走りよって、なんなく首をとって手柄をあげた話などがのっている。

神戸では源平合戦以来、戦国時代にはたびたび戦争があったが、花隈合戦ののちは、徳川時代からは太平となり、もう戦争はなかった。いわば花隈合戦は、神戸での最後の戦争となっている。

町内の商業分布

昭和45年10月調

（町内とは花隈新興会・自治会の区域内とす）

神社	1	寺院	1	教会	3	各種学校	2	幼稚園	1	検番	1	弁護士	1	税理士	3	設計士	2	建築	2	電機	4	電器	2	呉服	3	有芸師匠	6
料亭	26	寮	6	クラブ	1	グリル	2	バー	1	スタンド	2	仕出し	2	すし	1	そば	1	食堂	3	軽食	二	お好み焼	1	喫茶	5	製菓	2
製麺	1	酒類	2	食料品	3	パン菓子	4	旅館	4	薬局	2	浴場	1	理髪	1	美粧院	4	文房具	1	写真	1	諸印刷	1	青写真	1	紅茶卸	1
質	1	表具	2	書籍	1	クリーニング	2	マッサージ	2	造園	1	住宅建設	1	紹介	5	古物原料	1	麻雀	2	葬儀社	1	鈑金製造	2	看板	2	レコード	1
船具	1	ガソリンスタンド	1	マンション	15	アパート	12	モータープール	10	貸ビル	5	内科小児科医	1	外科医	1	耳鼻咽喉科医	1	歯科医	3	洋装	1						
凍氷薪炭	1	カーペット	1	化粧品製造	1	自動車修理	1																				

花隈新興会々員名簿

（アイウエオ順
番号は巻頭略図番号）

番号	営業品目	屋号	氏名	住所	電話
1	写真	青山写真館	青山柳三	花隈町九一ノ三	㉞〇六〇一
2	喫茶	繁富	秋谷繁雄	下山手通六丁目四七	㉞二七九一
3	料亭	阿らい	新居まさえ	花隈町一一九	㉞二五四五 二五四六
4	食料品	安富	安富一子	〃 五六	㉞一一二七
5	マンション	石尾マンション	石尾富雄	〃 五四	㉞四六八六
6	〃	石川マンション	石川寿美子	〃 五九ノ三	㉞六三八八
7	和菓子製造	播磨屋	石橋昭三	〃 五八ノ四	㉞一四八四 八七九〇
8	青写真	㈱桜商会	石原晃	〃 一七〇	㉞代 六四六一
9	美術看板	第一工芸㈱	磯山朝男	〃 一一五ノ一	㉞〇一九六 六二七八
10	料亭	みつや	磯野光子	〃 四二ノ三	㉞五一三八
11	席貸	福六	伊津美喜	〃 一五三	㉞二一三八
12	料亭	長駒	今井良三	〃 九〇	㉞七二一八
13	料亭	松乃家	鵜殿礼栄	〃 六五ノ二	㊲一九二一 一三
14		神戸民主商工会	大森志久男	〃 一六一ノ二	㉟一二九一